



〈連載⑤〉

サンフランシスコの ディナークルーズ



大阪府立大学船舶工学科助教授

池田 良穂

2年ぶりに サンフランシスコにやって来た。サンフランシスコの港は何本もの栈橋が櫛の刃状に突出したかなり大規模な港湾である。太平洋横断航路の客船が頻繁にゴールデンゲイトブリッジの下を通過してこの港に入ってきた頃は、まさにサンフランシスコはアメリカの太平洋への玄関口と言えた。しかし、定期客船の時代が幕を閉じ、さらに貨物船もコンテナ船に様変わりしてそのターミナルが対岸のオークランドに造られると、古いサンフランシスコの港は年々さびれ、今ではここに入港してくる大型船舶はほとんどない。そして、その一画にある漁港を中心としたフィッシャーマンズワーフ付近だけが観光スポットとして観光客で賑わうだけになってしまった。

しかし、今、サンフランシスコの港湾は物流基地としての機能をほとんどなくし、市民のため、観光客のための施設へと大変貌を遂げつつある。フィッシャーマンズ・ワーフの整備に続いて、ピア39（第39栈橋）の再開発が大成功して、観光客だけでなく市民の憩うウォーターフロントと変身し、それに続いて他の古い栈橋も次々と再開発されつつある。

海洋開発関係の 国際会議に参加するためにサンフランシスコに来た機会に、空いた時間を利用してこのウォーターフロント再開発の状況やディナークルーズにも乗ってみたので、その中からディナークルーズに乗った時の印象を簡単に紹介したい。

ホテルで入手した観光バスツアーのパンフレットによると、現在の所、本格的なディナー・クルーズをやっているのはホーンブローワー・ダイニング・ヨット社とモンテカルロ・クルーズ社の2社のように、料金はバスでの送迎も含めて前者が60～71ドルに対し後者は42～54ドルと前者の方が若干高い。また、前者には服装の指定があってジャケット&タイとある。写真によると船も前者の方が若干魅力的だったし、ニューヨークで人気のヨット・クルーズと同様に会社名に‘ヨット’（個人所有の豪華船の意）という名前がついているのも気に入って、ホーンブローワーのディナークルーズをホテルから申し込んだ。クレジットカードの番号を伝えて予約をすると、たとえ来なくても料金は自動的に取られるがよいかとのチェックがあり、了解すると予約が完了。料金はバスによる送迎なし、ディナー料金込みで、49ドルであった。

当日 夕方7時にピア33の乗場に行くと、前述の2社のデイクルーズ船が並んで係留されていた。ホーンブローワー社のロード・ホーンブローワーは古い蒸気観光船をモデルにしたシックな船なのに対し、モンテカルロ社の方はモダンな高速船タイプの小型な船で、全体にクローズドされていて楽しむクルーズにはやや向かない印象を受ける。そのせいもあってか、ホーンブローワー社には長い列ができているのに対し、モンテカルロの方は乗客の数が少ない。また、その船姿だけでなく、ターゲットの絞り方、集客のやり方、料金設定のしかたなどでそのクルーズ事業が成功するかどうかが決まるのであろう。そう言えば、ホテルでディナー・クルーズがあるか、と聞いた時にはホーンブローワーのパンフレットだけを渡してくれた。こうした客と直接接する第一線の人々に如何に自社のクルーズの印象を植え付けるかが重要なポイントであるが、これはなにも本格的な長期クルーズ事業だけではなく、こうしたデイクルーズ

にも言えることであろう。

記念写真を撮ってもらい、いかにも船長らしい威厳のある髭づらのキャプテンと握手をして乗船。ダイニングルームの前で名前を告げるとウェイターがテーブルまで案内してくれる。なかなか行き届いたサービスである。

ディナーは、シェフの前菜、サラダに続いてメイン・ディッシュは4種類からの選択。なかの一つはアドミラル・リバーस्टと名付けられたステーキとロブスター料理で、これだけは20ドルの追加料金があるという。迷わずこれを注文した。これでも乗船料も込みで70ドル、約9,100円だから、円高のせいもあるが日本の船に比べるとやや割安感がある。カリフォルニア・ワインのボトルをとって、サンフランシスコの夜景を眺めながらの夕食はなかなかのものであった。サンフランシスコ湾の入口にかかるゴールデンゲートブリッジ、アルカポネが収容されていた牢獄の島アルカトラス、サンフランシスコと対岸オークランドを



結ぶベイブリッジ、コンテナターミナルなどの周辺を回るうちに、夜も9時近くになった。まだうっすらと明るさが残る。食事が終わる頃には、陽もすっかり沈んでサンフランシスコ中心街の摩天楼の夜景が美しく浮び上がる。バンドに合わせて踊る人や、食後のブランデーを片手にデッキに佇む人など船上にはいろいろな人間模様が見られる。デッキでは海の涼風がさわやかである。その中で外国人のカップルが寄りそう姿はなかなか

ムードがあってよい。ただし、最近のアメリカ人はやや太りすぎの人が多く、美しい夜景の前のシルエットが太いのが多いのは気になったが……。

航海時間は乗船してから約3時間半ほど。食事した後少しゆっくりとできる時間があり、その頃が夜景の素晴らしいものなかなかよいスケジューリングとなっていて感心した。夜10時半にピア33に着岸し、船員の見送りをうけてそれぞれ帰路についた。

世界の客船の百科事典最新版

編集：山田廸生・池田良穂

世界の客船 '90

PASSENGER SHIPS OF THE WORLD '90

好評発売中！！

現在、世界で活躍する5,000総トン以上の定期客船、クルーズ客船を全て写真と要目そして解説をつけて紹介した客船の百科事典。

すべての客船ファン待望の一冊。

定価：4,800円

発行：船と港編集室

販売：舵エンタープライズ

お近くの書店にお申し込み頂くか、直接販売元の舵エンタープライズ（郵便振替：東京6-79562 Tel.03-3267-1950）または発行元の「船と港編集室」（郵便振替：大阪5-116868）にお申し込み下さい。送料は310円です。